

日本語文法（現代）

森 雄一

文法学と表現学の関わりの現在地点を
探る上で重要なシンポジウムが、表現学
会第54回全国大会（2017年6月）におい
て開催され、その成果が本誌第106号に
掲載されている。いずれの論考も、論者
がまずは自身のテーマとなる文法現象の
記述と意味づけを行い、そのもとで表現
学との関わりを論じるスタイルをとる。
早津恵美子「使役文にみられる恩恵授受
性」は、使役文と授受文の全体像を理解
する上でも有益であるが、恩恵授受事態
のうちには授受文で表現できないものが
あり、ある種の使役文が文法的な意味と
してではなく表現的な効果として、そう
いったすきまを埋めるものとして機能し
ているという指摘はきわめて示唆に富
む。木下りか「文学テキストと認識的モ
ダリティ形式」は、「らしい」と「ようだ」
の使い分けを視点人物からの距離感の違
いとする分析と、「ようだ」と「確言形」の
使い分けから、「ようだ」が「現実からの
浮遊感」を表すという分析が行われている。
認識的モダリティ形式についての独
自の意味分析をふまえたものであり、文
法論の展開としての表現論が優れた形で
実現している。また、「らしい」を自己に
対する表現として用いる場合、（認知言
語学の用語でいえば）「客体化」の表現効
果が出ていることの指摘は、評者として
は非常に参考になった。長谷部亜子「事
態把握と語り」は、コノウエとソノウエ
の前件・後件のあり方について手堅い論
証を行った上で、話者の視点からそれぞ

れどのように事態把握の形式が異なるか
を論じ、さらに語り論と接続している。
語り論は、表現学と文法学の接点として
最重要なものの一つであるが、新たな観
点がこの論考によってもたらされている。
上の3論考には、多門靖容の手際の
よいまとめと今後展開されるべき論点の
提示がシンポジウム報告の形で付されて
おり、参考になる。

現代語文法に関する2016・2017年の
大きな成果としては、藤田耕司・西村義
樹編『文法と語彙への統合的アプローチ』
（2016年5月・開拓社）と天野みどり・
早瀬尚子編『構文の意味と拡がり』（2017
年11月・くろしお出版）があげられる。
前者は、生成文法・認知言語学・日本語
記述文法の研究者がそれぞれの研究テー
マで著した論考とそれに対する異なるア
プローチの論者によるコメントの組み合
わせ15セットが収められている刺激的
な書物である。文法理論の現在を知る上
で最適なものであろう。後者は、「構文」
というタームを軸に13の論考が収録さ
れている。論者それぞれの「構文」観のず
れを理解することがこのテーマを自身の
問題として考えていく上で必要な作業
となる。語用論からみた文法現象の分析
もさらに重要になってくると考えられる
が、加藤重広・滝浦真人編『日本語語用
論フォーラム』2（2017年12月・ひつじ
書房）は新たな切り口を持つ論考を多く
収めている。なかでも、椎名美智「「さ
せていただく」という問題系」には多く蒙
を啓かれた。

（成蹊大学）